



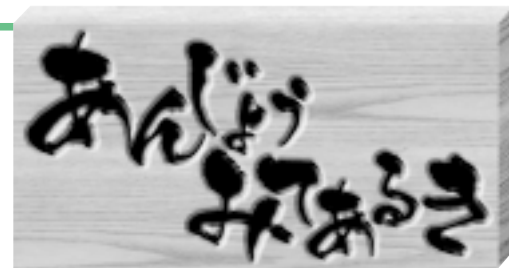
子安観音の参道の藤棚「城藤園」。
4月下旬から5月が見ごろです。



今月の案内人
岩崎隆雄さん、榊原しげ子さん
(城ヶ入町)



お堂は普段閉じられていますが、
毎週日曜日の午前中に開かれ、
参拝する人が大勢みえます。



その36

子安観音・ 城藤園

―昔、仲睦まじい若夫婦が赤ちゃんを授かりました。しかし、母の乳を吸う元気もなく、泣き声一つ出せず、今にも死にそうでした。若夫婦は西方を向いて「わが子を助けたまえ」と3日3晩祈ると、その晩、雷鳴が響き、稲妻が西の海に光輝き、大きな竜巻が天に向かって登り始めました。その竜巻は二つに割れ、中から観音様が現れたのです。

観音様は「働き者で正直者なあなたたちが、わが子を思う一心で仏を拝んだその心、誠にうるわしい。信心の心を怠らなければ、必ずその子は健やかに育つであろう」と言いました。若夫婦は夢を見ている心地でしたが、はっと気づいて西の海に出ると、岸辺に小さな観音様の像がありました。そして海の彼方へ大きな亀が泳いでいったのです。

若夫婦は、早速その観音様をお祀

りしましたが、貧乏なため観音様にあげるお灯明の油もありません。ところが夜になると不思議なことに、明るい火が観音様の前につくのです。それから3年間、お灯明を毎夜欠かさずあげたのは、竜宮城の使いの大きな亀でした。その間、若夫婦は必死に働き、また子どもは見違えるほどすくすくと育ちました。そして4年目からお灯明の火を若夫婦があげるようになると、大亀は安心したのか、再び姿を見せることはなくなりました。

この昔話が物語るように、この観音様は「子のない方には宝子を、子どものできた方には安産を、生まれた子には健康」を授けてくださるというので、子安観音と呼ばれています。城ヶ入町は半場川と朝鮮川に挟まれた台地先端部で、周りはお入り江でした。私たちも以前、子

安観音の周囲で貝殻を目にしたことがあります。だから、海や竜宮城の亀にまつわる昔話が残されているのですね。

7年に一度の観音様の御開帳は、この地域の一大イベントです。お堂にある観音様の手から城ヶ入町公民館までの数百メートルの間を、さらし布を何本もつなぎあわせていきます。これを「善の綱」と言い、これに沿って人々が「子どもが元気に育ちますように」「安産でありますように」とお願いしながら歩くことで、布に人々の気力がそなわると言われています。このさらし布は「安産帯」として人々に分けられます。前回の御開帳は平成15年に行われ、次回は平成22年。7年に一度開かれる、この地域の伝統文化を私たち、そして次の世代へと代々受け継いでいきたいものです。

一番楽しいのはライブ
いい曲を作ってたくさんライブをしたい



―あまり実感が無いというのが、正直なところなんです。バンド活動を続けていくうちに、拾ってもらえたというか。デビューを機に変わ

全国各地でのライブ活動で注目され、ついにCDデビューを果たした5人組バンド「竹内電気」。今回は、安城市在住の斉藤伸也さんにお話を伺いました。

―まずはCDデビューの感想を。

―曲作りはどのように？

一人が詞を書いたら、そのままメロディをつけて、あとはメンバー全員で肉付けしていきます。詞はできるだけメッセーj性を持たず、聞き流してもらえるように心がけています。

―音楽を始めたのはいつから？

中学1年の時にギターを。昔から特にこれが好きというようなジャンルはなくて、いろいろなものを聞いていました。



竹内電気

メンバー全員が三河地方に在住する5人組バンド。今年2月に7曲入りのミニアルバムでCDデビューし、現在は全国でのライブ活動を行っています。

バンド名の由来はリーダーの実家が営む会社名から。

メンバー(敬称略)

竹内サティフォ(21歳、高浜市)リーダー、ギター
斉藤伸也(22歳、安城市)ギター、ボーカル
山下桂史(22歳、高浜市)ボーカル、シンセサイザー
加藤広基(22歳、吉良町)ベース
苅谷達也(21歳、碧南市)ドラム

―ライブの評判がいいですね。

一番楽しいのがライブ。とにかく全国各地をまわって、たくさんライブをしたいと思っています。

―そのライブでの独特のパフォーマンスのため、ファンから「キモい」などと言われているようですが。

それはたぶん自分のせいだと思います。すよ。それを狙ったり意識してやっているつもりはないんですが。メンバーの中で一番自由にはしゃいでやってるからじゃないですか。

―では、今後の抱負を。

先のことはあまり考えていません。いっぱいカッコいい曲を作って、とにかく大好きなライブをたくさんやって、楽しく活動していきたいと思っています。ぜひ、皆さんにも、ぼくたちの音楽を聞いてもらいたいと思います。

筆者のつぶやき

全員がアルバイトをし、その合間を縫って全国各地へライブに出演するという多忙な日々を送っています。今回の取材も貴重な時間を割いていただき実現しました。CDデビューを果たしたとはいえ、気負うこともなく、自分たちの音楽をひたすら演奏する。その自然な姿がファンを増やしている要因なのではないでしょうか。